

壽老人

(春 山 武 松)

ナイル河のほとりで禮拜されてゐたアルゴ座のカノープス星は、もとく
南半球の星ではあるが、南極壽老人として大昔は支那人も知つてゐた。だから
吾々の位置からでも見えぬことはないのであるが、條件がなか／＼むつかしい。
一年中でこの星の見られるのは二月のよく晴れた夜だけで、紀元節前後なら午
後九時ごろ、南の地平線に近く、高さ僅かに二度ばかりといふのだから、家並
のたてこんだ都會などでは思ひもよらぬ。しかし京都や大阪で見たといふ人も
あり、東京でも見えぬことはないとある。幸に私は海岸近くに住んでゐるので、
どうやら望みはありさうである。それに、見えにくいといはれるだけに猶更、
是非見てやらうといふ意地も出る。

縋袍に懷手をして、のつそりと眞暗な戸外に立つ。一月も半を過ぎるとオリ
オン座の三星がだん／＼高くかゝつて来る。引きずられるやうに、シリウスも
あとを追うて昇る。その大犬の臀に當る三つの星が指示星として大切なのだ。
それが、日ごとに高くなるにつれて、カノープスも、やがて地平の上に姿を現

はす時が来るのである。

晴れた夜ばかりが續かぬもごかしきもある。曇り勝ちな地平の面憎さもある。冬空に現はれる主な星を、ズブの初心から一つづつ覚えてゆく。北極星を軸として一夜にぐりと回轉する星座の移動を、時間と關聯させながら、大體の構圖をのみこんでゆく。かうしてカノーパスが現はれる位置の、見當がつくまでの準備工作は、一苦勞であつた。そのうへ、自宅の門前からは、南への見通しが利かないので、一町ほど離れた濱邊まで何度か出かけなければならなかつた。嫌ひな犬に吠えられて、困つたこともある。突差の場合、仕方がないので、四つ這ひになつて、ワンと吠え返した。獅子が頭を擡げる夕暮から、昂が傾く曉近くまで、一晚のうちに何遍となく出入りして、骨身に沁みとほる木枯に、吹き曝されるのも、物好きの報いだらう。

たうとうその日が來た。二月八日は、陽のある間、寒波の名残りをうけて、粉雪のちらつく空模様であつたが、夕方から、拭ふが如くに晴れた。南の地平にかぶさつたドス黒い雲は些か氣になるが、この調子だと、夜に入つて、消えるだらう。陰曆の二十日で、月の出が遅いのも、都合がいゝ。夕飯後のソ

ワソワした時間も過ぎて、九時をうつ。時は今だ!! けれども寒さは寒し、暗さは暗し、犬のこともある。加勢に子供たちを誘つてみたが、黙つて笑つてゐるばかりである。それではヨシツと起ち上つて、ステッキを手持つた。そしていつもの防潮堤（兵庫縣武庫郡精道村打出字前濱）へ急いだ。海を隔てた紀州の山々は、ほの明りに漠としてゐるが、豫て、つけておいた見當をすかして見ると、海水に濡れさうなところに、一つ大きく光る星がある。ピーンと響くやうな緊りかたで、直に指示星大犬座のエータ、デルタ、エプシロンを見上げる。この三星がつくる直角の二等分線上に沿うて南へ、シリウスから三十六度。ピタリと眼は再びもとの星に戻つて來た。間違ひなし!!

全天第二の光輝をもつといふカノーパスも、微かながら濛氣に遮られて、やゝ赤味を帯びてゐた。けれども、ちつと眸を凝らしてゐると、この星の持前である青白色光が、ときどき混つて瞬くのであつた。色と光の交錯で囁きかける星の瞬きの幽玄な意味あひは、少しでも星に興味をもつほどの人なら容易にうけ入れられる感であるが、いま、私は滅多に見られぬこの星の瞬きを、聖なるものとして、悲壯な氣持で向ひあひながら、冴えかへる濱邊に立ち盡してゐた。

蘆屋の濱からカノーパスが見えることなど、分つてゐる人には、飛んだお笑草であるだらうが、ともかく私は自分の眼でカノーパスをみたのである。

〔附記〕 カノーパス (Canopus) はアルゴ座ア星。赤經六時三二分、赤緯南五二度三八分。分光型F。此星はシリウスに次ぐ大光輝の星で、負〇・九等である。距離は大約五〇〇光年、我が太陽に比ぶれば直徑一三〇倍、光量八〇〇〇倍で、ラーキー (Walker) は此の星が我宇宙の中心體であるとの説を出した事がある。

此の星は毎年二月頃の夕刻に南中するのであるが、何分にも南緯が低いため見えにくい。日本本土の中部以南では漸く認め得る。臺灣では地平線上高く仰がれる。西洋でも此の星を見るため態々地中海の南岸に旅行した人があつた。支那では此星を壽老人として崇拜し、之が見えれば幸福だと信じた。

地球と兄弟星四つずらりと一列に

何百年に一度しか起らぬこの三月頃に

當地の新聞に、同封の如き記事が出てゐましたので早速御送り致します。同記事は主として小學生のためのページに掲載されたものです。草々 (十一月七日)

東亞天文協會御中

臺北市 賴 武 揚

不思議な大空がまた一つ見られます。お話は、来る二月から三月へかけてのことですが、これは何百年目に一度しか起らぬといふ大空の不思議ですよ。夜空にかゝやく明かるい星が四つも重なつて見られるのです。御存じのとほり太陽のまはりをぐるぐる動いてゐる地球の兄弟星は太陽に近い方から數へると、

水星、金星、地球、火星、木星、天王星、海王星、冥王星の九つですが、天王星以下の三つは遠すぎて眼に付かず、水星は太陽に近すぎて、時たま朝と晩の日の出と日の入の前後、ほんのしばらく低く西の空に見えるだけです。残りの星のうち木星は、月を別にすれば、夜の空で第一等の明かるい星ですし、金星は宵の明星や明の明星としておなじみの光る星、火星は「火星兵團」で大評判の赤い大きな星ですし、土星は環がついてゐて、去る十月二十二日ごろ一等地球に近づいた。ボンヤリ光る大きな星が、來年の二月ごろには、地球と一列にキチンとならぶことになり、地球の上から見ると、四つの明星が空の一點に重なるわけです。毎晩だんだんに近づいて行つて、おしまひに重なるまで、どんなすばらしい見ものか、考へて見ても胸がをぎるではありませんか。昔からかういふことは稀にしかなくつたので、何か地上に大變なことの起るしらせだと言はれ、リストの生れた年には、六つの兄弟星が重なつたといふ言ひ傳へなごもありますが、餘りあてにはならず、つまらぬ迷信です。しかし地球の兄弟星を四つも一枚の寫眞にとれるのは非常に珍しい事なので、天文學者たちも楽しみにして待ちかねてゐるさうです。